

横になるなり、もうスヤスヤとねいってしまいました。王子はこんばんは、その手にのるものかと思いながら、テーブルに両ひじをついてたかのように目を光らせて、一生けん命に王女の顔を見すえていました。するとそのうちに王子は、またひとりでに、まぶたが重たくなって、とうとう今晚もまたねこんでしまいました。すると、ちょうど同じ時に、あれほどいばっていたナガナガや、ブクブクや火の目小ぞうも、みんな一度にコクリコクリといねむりをはじめました。王女はさっきから、上手にねたふりをして、王子たちがね入るのを待っていたのでした。王子はグウグウといびきをかいて、まるで石のようにねむりこんでいます。王女はそれを見ると、ニコニコ笑いながら、そうっとおき上がりました。そして今度こそは、だれにも感づかれないようにひょいと小さなハエにばけて、すうっと